

ばくおん！

グラン(団長)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

けいおん！の二次小説になります。

某女子高生とバイクのアニメとは関係ありませんのでご注意ください。

バンド好きな主人公がけいおん！の世界でバンド活動をしながら、キャラクター達と絡んでいく予定です。

現在就活中のため、気の迷いで書いてます。

エタリストなのでご注意ください。

7 6 5 4 3 2 1
羽 話 話 話 話 話 話

--	--	--	--	--	--	--

76 54 44 34 21 10 1

目次

1話

「今日はありがとうございました」

「いやいや、こつちのセリフだよ。君達のおかげでお客さんいっぱい来てくれたし、これバツクね」

今日も無事ライブが終わった。

ここらの界限ではだいぶ名が売れてきたおかげか、30人ぐらいのお客さんが毎回入ってくれている。

ありがたい限りだ。

「それじゃまたよろしくね。君達そろそろCD作ったら？レコーディングしたくなったから、ちよつとは安くするからせひ言ってね」

「おーバンド内でもそろそろCD作りたいって話上がってるんでお願いすると思います、詳細が決まったら連絡しますね」

「オツケー、待ってるね」

精算が無事終わり、外で待ってるメンバー達に合流する。

「精算終わりましたー。これバックです」

「お、今回もなかなか入ったみてえだな。まあ、俺は今は金に困ってねえし俺の分はトシにやるよ」

「僕も、トシ君の生活費にしてよ」

「もちろん私のもね」

「……毎回すいません、ありがたいっす」

毎度の事ながらメンバーのみなさんには頭が上がらない。

バンド内で俺が唯一の学生で、みなさんは社会人という事もあるが、大人の余裕が眩しい。

「トシまた新しい機材買ったんでしょ？このバンドの曲はほとんどトシ君が作ってくれてるんだし、それくらいはね」

ギターの河口さん。

メンバー唯一の女性で紅一点的な位置だが、ショートカットで遠目に見たらただのイケメンである。

「そうだよ、僕達は仕事してるけど、トシ君は学生で一人暮らししてるんだもん。それくらいは大人に甘えてよ」

ベースの原さん。

眼鏡をかけた優しい雰囲気……というか普通に優しい人。

こう見えてライブになると荒れ狂う、演奏中にベースのヘッドが襲ってくるが多々ある。

「まあ、俺達はライブができりや満足だからな。出世払いで大人になったら酒でも奢ってくれりゃいい」

ドラムのコリアスさん。

筋肉ムキムキのハーフ、生粋の日本育ちのため英語は喋れないらしい。

実はどこかの社長らしく、メンバー内で一番お金持ち。

「ありがとうございます……、そういうえば川上さんがRecしないかって。少し安くしてくれるそうですよ」

「お！そいつはいいな！曲もそこそこあるし、ミニアルバムでも作るか」

「僕も賛成、今は仕事も忙しくないしちようどいいね」

「私も同感、それじゃあどの曲録るか考えておこうか」

「了解です、曲と、いつ録るかですね。それじゃあそれぞれ入れたい曲と都合のいい日にちをメールしてください。まとめておきます」

「さっすがリーダー頼りになるぜ！」

リーダーって……、まあこのバンドに誘ったのは俺だけでも、このメンツの中でリーダーを名乗るのはハードモードだよ……。

「あ、あの!!!」

「ん?」

声をかけられた気がしたので振り返るとツインテールの女の子がいた。

「どうかした？」

『Invidia』のボーカルの方ですよね!!ライブが見てました!すごいカッコよかったです!!!」

「おお!見てくれてたの!ありがとうね!みなさん、この子ライブ見ててくれたらしいですよ、カッコよかったです」

「おお!こんなちっちゃいのにハードコアにはまっちゃうなんて、不良だなあ!!!最高じゃねえか!!」

コリアスさんが脇の下に手を入れ、そのまま持ち上げ回りだす。

場合によってはセクハラで訴えられる状況だが、女の子が小さいのと、ムキムキハーフだがイケメンなおかげで微笑ましい光景に見えなくもない。

まあ、我々『Invidia』は先程コリアスさんが言ったようにハードコアバンドなため、女の子のファンなんてめったにいないからコリアスさんも嬉しいのだろう。

「ほらコリアス、その子目回しちやってるから下ろしてあげな」

「おお！そいつはわりいことしちまったな、すまねえな嬢ちゃん！」
「ううう……、だ、だいじよぶです……」

パツと見大丈夫じゃなさそうだけど、いい子やなあ。

「うちのゴリラがごめんね。君みたいな若い女の子のファンは珍しいから、年も考えずにはしゃいじやったみたいで」

「い、いえ、大丈夫です。あの、もしかしてギター弾かれてた……？」

「そうだよ、河口紀美、よろしくね」

「私、中野梓っていいいます!!!私もギター弾いてて、それで、凄い上手だなんて思って、フリーズもカッコよかったし……」

「ははは、ありがとね。でも、うちのバンドの曲を考えてるのはほとんどトシなんだよ」
「そうなんですか!？」

うわ、こつちに予先が向いた。

こんな目キラッキラされるとなかなかこつぱずかしいな。

「いや、ソロフレーズとかアレンジとかはみなさんに任せきりですし」

「いやいや、持つてくるdemoの段階であそこまで完成度高いとこつちも気合い入れなきゃいけないからね」

「でも、みなさん凄かったです！ギターはもちろん、ドラムはあんな早いブラストビートを簡単そうに叩いてましたし、ベースはソロのスラップにパフォーマン스에 圧倒されちゃいました！」

中野ちゃんの力説にそれぞれ、いやいや、とか言いながらまんざらでもなさそうな顔をしている。

まあ、この人達普通にプロでやっててもおかしくないからな。

たまにスタジオミュージシャンとして誘われることがあるみたいだし。

「それに、ボーカル！私、あんなに歌が上手い人初めて見ました！それにデスボイスもすごい声量でしたし、ギターを弾きながらあれを歌うなんて……感動しました！」

「おお、あ、ありがとね。今Recするつて話してて、そのうちCDができると思うから、よかつたらまたライブ見に来てよ」

「本当ですか!?絶対行きます!!!……あ、すいませんお話中だったのに急に声をかけ

ちゃって。……わ、わたし、また来ますから！がんばってください!!!」

そう言う中野ちゃんは早足に帰ってしまった。

途中で我にかえて恥ずかしくなったらしい、顔が真っ赤だったなあ。

「……行っちゃいましたね」

「いい子じゃねえか、こりやRecも全力でやらなきゃならねえな」

「当たり前でしょ、手抜きなんてしたらトシに首にされちゃうよ」

「いや、そんなまさか……」

「それは困る、僕も家に帰って練習しようかな」

「原さんまで、あまりからかわないでくださいよ……」

「ははは、ごめんごめん。それじゃあそろそろ解散しようか、トシ君明日も学校あるでしょ？僕も仕事があるしね」

「おう！そんじゃ、俺も帰るとするか。今日も楽しかったぜ、じゃあな！」

「私も、いろいろ決まったらメールするから。さわ子によろしくトシ。じゃあね」

「お疲れ様でしたー。またよろしくお願いします」

こうして今日も無事ライブは成功でした。

平日は学校に行き、曲を作りながらたまにライブをする。

K-ON!の世界に転生した俺、山中斗心の日常は今のところこんな感じである。

さて、次はどんなバンドの曲をオマージュしようか。

2話

「お疲れ様でーす」

「お疲れー、トシ君学校もあるのに頑張るねえ」

「欲しい機材は尽きないっすからねえ……」

「さすが、今度CD作るんでしょ？俺も欲しいからライブ決まったら教えてよ」

「あざっす、了解です」

学校終わりのバイトはキチイぜ。

まあ、楽器屋だから暇なとき試奏とかさせてもらってるから楽しいんだけどね。

曲作る時間も欲しいからなあ……、新しい曲はCHONみたいなのにしようと考えている。

ハードコアの曲だけだとお客さんも限られちゃうし、どうせならいろんなジャンルを手広くやりたい。

テクニックは問題ない、今までもハードコアだけじゃなく聴かせる曲もやってきたし、メンバーみなさんオールマイティーにどのジャンルでもやれるようになった。

河口さんにクリーンのアルペジオを弾くように頼んだときは大変だった……、歪みがないと体が疼くらしい。

「トシ君！お客さん来てるから！バンドの事考えるの一旦ストップ！」

「あ、すいません。じゃあ、ちよつと行つてきますわ」

危ない危ない、過去に思いを馳せるところだった。

というか若千馳せてた。

お客さんは、……あれは高校生かな？

四人の女子高生がギターを見ている。

本来店員として、うちのブランドのギターをおすすめするべきなんだが……、ありやもうGibsonに心奪われてるな。

「いらつしやいませえ、ギターをお探しですか？」

「え、あ、はい。私、ギター初心者でギターを探しに来たんですけど……」

「なるほど、……初心者の方でしたら安めのギターで練習をするというのも手ではりますね」

「……そうですよねえ」

「ですが、長く使うというのであれば最初から高いギターを買うのも私はいいと思いますよ。見た目で選ぶという方も多いですから」

「そうですね!!!」

おお、ショボンってしたと思ったたらいきなり元気になった。

よっぽどのこのギターが気に入ったんだな。

……しかし、25万するぞこれ。

さすがに高校生には高いと思うんだが。

ん？なんか四人で集まって相談始めたな。

「おい、唯。本当にそのギターにするのか？25万だぞ？」

「でもね、りっちゃん。店員さんも言ってるよ？見た目で選ぶ方もいますって！」

「そうだよね、初めての楽器なんだし、気に入ったヤツがいいよね」

「そうか、……こうなったら、やはり値切るしかないか！」

「あ！それじゃあ私が値切ってみてもいいですか？私、やってみたいです！」

「おお！行ってくれるかムギ隊員！」

「任せてくださいいりっちゃん隊長！」

どうやら相談が終わったらしい。

値切りかあ、……正直一バイトの俺にはそこまで権限はないんだけどなあ。

「あのお、……値切つてもいいですか？」

「……少々お待ち下さい」

よく見たらこの子社長の娘さんっぽいし、社員さんに丸投げしよ。

――――

――

――

――

「これくらいでいかがでしょうか？」

「5万円?!?!?! ムギ隊員、……お前いったい?!?!?!」

「実は、パパがここの社長なの」

どうやら後ろでは値切り交渉が捗ったらしい。

すいません社員さん、俺には社長令嬢を止めることはできなかつたよ。

「……で、今教えたコードを順番に鳴らせばフレーズができますよ」

「えーと、これと、これと、これで……すごい！ギター弾けた！ねえねえ見て見てみんな！私ギター弾けるようになったよ！」

喜んでもらえたらしい、ずっと物欲しげに眺めていたので試奏をしてもらった。

GreenDayは簡単なパワーコードだけで弾けるから初心者にはやりやすいと思う。

「おお！やるな唯！」

「すごいわ唯ちゃん！」

「そのフレーズカッコいい、……なんの曲？」

「え、わかんない。店員さん、なんて曲ですか？」

「え、あーと、海外のバンドの曲ですよ」

ちなみにこの世界では、有名なプレイヤーやバンドはいるのだが、曲が若干変わっている。

著作権の関係かな？

前世の記憶で探してみたら微妙な違和感がありまくりで気持ち悪くなったのはいい思い出だ。

いや、よくはねえか。

「それより唯、ムギにお礼言えよ。なんとそのギター5万円で売ってくれるってよ」
「ええ!?ほんと!?ムギちゃん!!!ありがとう!!!」

「うふふ、これで唯ちゃんも一緒にバンドできるわね」

おお、女子高生が抱き合ってる。

これはいい百合ですなえ。

抱き合う前にギターを下ろしてくれと思わないでもないが、ほとんど購入決まったよ
うなものなので野暮は言うまい。

こうしてまた新たなバンドマンの門出に立ち合えたのは嬉しいことである。
というか今原作始まったぐらいのどこだったんか……。

――

――

――

「お買い上げありがとうございます、またなにかギターのことでも質問があるようでしたらいつでもいらしてください」

「はい！ありがとうございます！」

元気がよろしい。

あと後ろのカチューシャしてる子、頼むから社長の娘さん使ってドラムセット安く買うとか怖いこと言わないで。

いいぞ真面目そうな子、まとも枠っぽい、頼むからカチューシャの子を押さええといってくれ。

これ以上あれやられると経営難不可避だからね。

「「「ありがとうございましたー」」」

「またお越し下さい」

先輩がぐったりしている。

「どうしたんですか先輩？」

「……店長に怒られるかなあ」

「……そんときや俺も一緒ですよ」

――

――

――

――

――

「すいませーん」

「ああ、いらつしやいませ。本日はどんなご用ですか？」

「この前教えてもらったコードは弾けるようになったんですけど、他が全然わからなくて。……オススメの本とかありますか？」

「でしたら、こちらの猿でもわかるシリーズが個人的にはオススメですね。題名通りに初心者の方でも分かりやすいですし、簡単に有名な曲の楽譜も載っているので飽きずに練習できると思いますよ」

「じゃあそれを買いますー！」

まさかの即決。

ギター弾きたくて仕方ないんだろうなあ。

わかる、わかるよ、my new gearって気持ち。

「うちでは楽器教室もやっていますから、もし興味があつたらぜひ。マンツーマンで教えてもらえますし、体験教室もありますから」

「楽器教室！いいなあ！私も……」

突然なにかを思い出したように固まってしまった。
新たな顧客を確保したと思っただけだ。

「大丈夫ですか？」

「……テストが、あります」

「なるほど、……でしたらテストが終わったらまた言っていただければ、体験教室でできるよう手配しますよ」

「本当ですか!？」

「はい、一応お名前をうかがってもよろしいですか？」

「平沢唯っていいいます!」

「平沢唯さん、……はい、ありがとうございます。では、テストが終わりましたまたいらしてください」

「ありがとうございます!それじゃあまた来ますね!」

「お待ちしております、テスト頑張ってくださいね」

原作主人公は走って去って行った、さすが主人公だけあってエネルギーが違いな。

精神年齢40近くいってる内面おっさんとはレベルが違うぜ。

┆┆┆┆┆┆
┆┆┆┆┆┆
┆┆┆┆┆┆
┆┆┆┆┆┆
┆┆┆┆┆┆
┆┆┆┆┆┆

「……追試になってしまったので、まだテスト勉強が終わりません」

「……でしたら追試が終わった頃に体験教室することにしましょうか。……あの、追試頑張ってくださいね」

「はい、ありがとうございます」

なんていうか、リビングゲッドって感じだったなあ。

3 話

「ちよつと聞いてよトシ、私軽音部の顧問になっちゃったんだけど」

「はいはい、よかったですね」

「よくないわよ！顧問っていろいろ大変なんだからね、部活で休みもなくなるし、いろいろ手続きもあるし」

「はいはい、大変大変」

「ちよつと、ちゃんと聞いているの？」

「はいはい、聞いている聞いてる」

「聞いてない」

酔っぱらいのダル絡みは犯罪だと思ふ、いやマジで。

どうやら姉さんが軽音部の顧問になったらしい。

正直やつとかと思わなくてもないが、まあアニメと違って生活してるから長く感じるの
はしょうがないだろう。

「つーかわざわざ愚痴りに来たのかよ……明日も学校だろ？」

「いいじゃない姉弟なんだから、着替えも置いてあるんだし。それにあんたの家のが学校に近いしね」

「まあ、別にいいけどよ。……俺これからR e c しに行くから適当に寝といて」

「高校生のくせに夜遊びとほいい度胸ね、どんどんやれ」

「おいそれでいいのか教師」

「いいわよ別に、紀美もいるし、コリアスさんも原さんもいい人達だしね。あゝ、私もまたバンドやりたいな」

「やりやいいじゃん」

「ダメよ、これでも学校では優しくして美人な学校中の憧れさわ子先生なんだから」

「はいはい、ワロスワロス。そんじや行ってきます」

「あんた覚えてなさいよ。……気をつけてね、行ってらっしゃい」

さてと、そんじや記念すべき発R e cだし、気合い入れて行きますか。

—————

—————

「……すいません、今のところもう一回録っていいですか？若干音程が気になったんで」
「いいわよー、それじゃ2小節前からいくわね」

――

――

――

――

――

――

「クソ！すまん、気に入らねえから今のところもっぺん頼む」
「はい」

――

――

――

「すいません、ちょっとシールド外れてしまったんでもう一度お願いしますね」
「あの、原さん？ R e c だから別に動かなくても、……いや、なんでもないわ。それじゃいくわね」

——

——

—

「なんか今のところ変じやなかった？」

「特に変には感じなかったけど……」

「いや、気になるからもう一回弾くわ」

「……オツケー」

——

——

—

「なんとか終わりましたね……」

「こうなるだろうとは思ってたけど、実際やってみると疲れるわね……」

現在深夜3時、8時頃から初めてRecに6時間、簡単なmix作業で1時間。

川上さんが死にかけてる、今度お礼になんか持つてこよう。

「いやあ、久しぶりのRecは楽しいぜ！なかなかいい感じになったんじゃないか？」

「そうだね、これならみんな納得してくれるんじゃないかな」

「まあもうちょっと詰めたい所もあったけど、これ以上やったらねえ……」

川上さんが河口さんのセリフで一瞬ビクッてなった。

さすがに俺もこれ以上は勘弁して欲しい、明日の学校が厳しくなりそうだ。

しかし、5曲入りのミニアルバムをこの時間でできたのはメンバーのテクニクがあつてこそだ。

「これなら次のライブの時には物販に並べられますね」

「CDのデザインはトシの持ってきたのでいいだろうし、俺のツテでプレスはしておく」

「さすが社長、頼りになる」

「ハツハツハ！任せておけ！」

正直本当に助かる。

業者に頼むにしてもやり取りが大変だから、それがないだけでもだいぶ楽になる。

さあ、あとはライブでどれだけ捌けるかだ。

—————

—————

—————

—————

—————

「よろしく願います！」

「はい、よろしくね。まずは自己紹介からでしょうか、俺は山中兔心。トシって呼ばれて

る」

「トシさんですね！平沢唯っていいます！唯って呼んでください」
「唯ちゃんね、よろしく」

さて、今日は唯ちゃんの体験教室当日である。

まあ、講師は俺なんですけどね。

バイトのはずなんだが、ライブを見に来てくれた店長が「you、ギター弾けるやん」って言ってそのまま講師になってしまった。

「ジーーーー」

「えっと、なにかな？」

唯ちゃんがすごい見てくる。

「トシさんって、さわちゃん先生の弟さんですか？」

「あ、バレた？後で言っただけでビックリさせようと思ったんだけど」

「やっぱり！なんとなく似てるなあーって」

「軽音部のことは姉さんから聞いてるよ、唯ちゃんのことも初心者なのに頑張ってるっ

て」

「えー、照れるなあ」

まあ、但し書きで「あれで勉強も頑張ってくれれば」ってつくんだけどね。

「とりあえず時間ももつたいないし、練習を始めようか」

「はい！」

「まずは手のストレッチから始めよう」

「ストレッチ？ギターは弾かないんですか？」

「ストレッチをしておく指が動きやすくなるからね、練習の前にやっておくといいよ。

こうやって指を順番に開いて、閉じてを繰り返していく」

「なるほど！よし！……あれ、こ、この！む、難しい」

「最初は誰でもそうだよ、ゆっくり順番にやっっていく」

――

――

――

「さて、それじゃあギターを弾こうと思うんだけど……、唯ちゃんチューナーは？」

「ちゅーなー？つてなんですか？」

「チューナーつていうのはギターの音程を合わせるのに使うやつなんだけど……、え、今までどうやってチューニングしてたの？」

「えっと、弾いてみて違うなあつて思ったたら、こうやって……、はい！」

「……あー、絶対音感持ちか。おけ、大丈夫」

「ん？」

「そーいや絶対音感持ちつて原作でも言つてたわ。

「チートやなあ、いいなあ。」

「とりあえず簡単なコードから弾いていこうか」

「はい！あ、この前の曲弾きたいです！」

「オツケー、あれはね……」

———

———

—
—

「ありがとうございます！」

「いや、まさか一曲完璧に弾けるようになるとは……。初心者とは思えないね、唯ちゃん
才能あるから頑張つてね」

「はい！頑張ります！」

原作主人公はさすがだったよ。

軽音部はみんな顔面偏差値も高いし、出るとこ出たらサイサイみたいに売れそうだよ
なあ。

「……あのお、すいません」

「トシさん！お客さんだよ！」

「え、ああ、ありがとう。……君は」

そこには、この前ライブに来てくれていた女の子、中野梓ちゃんがいた。

あれ？俺ここでバイトしてるって言ったっけか？

「あの、この前ギターの河口さんに偶然お会いして、そしたら山中さんがこのお店でギター講師をしているとお聞きしたので、教えてもらいたいなと思って……」

「あー、河口さんか。うん、全然大丈夫だよ、ちようど今唯ちゃんに体験教室してたところだから」

「私平沢唯！よろしくね！あなたもギター弾くの？」

「あ、はい。中野梓と言います、よろしく願います。ギターはまだまだなので山中さんに教えていただこうと」

「じゃあ、あずにゃんだね！」

「あ、あずにゃん？」

唯ちゃんのコミュカは見習うべきものがあるよね。

俺じゃあ初対面の人にはこんな絡みはできない。

「えー!?トシさんバンドもしてるの!?!」

「え、あ、うん」

「山中さんのやってる『invidia』ってバンドは、この辺りじゃ知らない人はいな
いぐらい有名なバンドなんですよ!」

「えーいいなあ、私も見てみたいなあ」

「あー、よかつたらCDもつてく? サンプルで何枚かあるからあげるよ。はい、中野さん
も」

「え、いいんですか!」

「うん、今度レコ発ライブするからぜひ見に来てね」

「行きます! 絶対行きます!」

「あ、ずるい! 私も行く!」

お客さんが増えるのはいいことです。

どうやら二人は意気投合したらしく、連絡先を交換している。
今度のライブに一緒に来てくれるらしい。

「それじゃあ私は帰るね、トシさんもありがとね! 私ギター教室やることにするよ!」

「毎度ありがとうございます、気をつけてね帰ってね」

「CDありがとねー! みんなにも聴かせてあげるから! あずにゃんもまたね! ライブ楽

しみにしてるからー！」

元気やなあ、あんなに走って転ばないといいけど。

「元気な人ですね……」

ですよね。

「それで、どうする？俺はこの後時間あるから、中野さんがよければ体験教室できるけど」

「いいんですか!？」

「いいよ、こちらとしてもお客さんが増えるのはありがたいからね」

「それじゃあぜひ!」

ありがてえ、ギター講師は歩合制でお客さん増えれば増えるほどお賃金が上がるからなあ。

……というか若干原作崩壊させた気がしなくもないけど、気のせいだよな？

4話

ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

「次で最後の曲だ！今日はありがとう！最後まで楽しんで行ってくれ!!!」

ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

最前列でもみくちやになりながら、周りに合わせてメロイックサインもどきを掲げる
唯ちゃんの姿に笑いそうになってしまう。

唯ちゃん、それメロイックサインじゃなくてキツネや、baby metalじゃない
んだから。

いや、「うおおおお」じゃなくて。

まあ、楽しんでくれてるようだなによりである。

河口さん、原さん、コリアスさんと視線を交わす。

次で最後の曲だ、ライブハウスのボルテージは最高潮、体力だけじゃ足りない、魂引
きずり出していかないよ。

「それじゃいこうか、……全力でかかってこいやあつ!!!」

—————

—————

—————

———

—

「カッコよかったよトシさん！もうぐわあああつてなつてどしやややつてなつて
ごおおおつて!!!」

「はいはい、ありがとね唯ちゃん。最前列にいるの見てたよ、怪我してない？」

「うん！すごい疲れたけど、すごい楽しかった!!!」

楽しんでもらえてよかった。

こうして初めて見てくれた人が楽しんでくれるのはバンド冥利に尽きるというもの
だ。

この瞬間に、バンドをやっていてよかったと心底思う。

「みんなもすごかったって言ってたよ！ね！みんな！ね！」

唯ちゃんの視線の先には、前に唯ちゃんと一緒にギターを買いに来た女子高生3人がいた。

「ああ、ギターを買ったときの。来てくれてありがとうとね、うるさかったでしょ」

「いえ、すごかったです。確かに激しかったけど、でも激しいだけじゃなくて綺麗なフレーズもあつたし……。な、律！」

「うんうん！ドラムもすごい音量だったし！すごいカッコよかったです！」

「ありがとね、唯ちゃんに話は聞いてるけどみんなも楽器をやってるんだよね？メンバーの人と話してみる？勉強になると思うよ」

「本当ですか!?!私田井中律っていいます！パートはドラムです！ほら、滯もベースの話聞きに行こうぜ」

「わ、私、秋山滯って言います。話は聞きたいけど、でも、ベースの人ちよつと怖そうだし……」

この子はちよつと人見知りかな？

……まあ、人見知りじゃなくても原さんはパフォーマンズだけ見ると狂人のそれだか

らな。

「原さんはライブ中はあれだけど、普段はすごく優しい人だから大丈夫だよ」
「え、じゃ、じゃあ少しだけ……」

二人をそれぞれ原さんとコリアスさんに紹介する。

二人ともいい人だしすごいプレイヤーだから勉強になるだろう。

「えーと琴吹さんと合ってるかな？」

「はい、琴吹絢といいます。気軽にムギちゃんと呼んでください！トシさんですよね？」
ライブ、すごかったです！上手く言えないけど、とにかくすごかったです！」

「お、おお、ありがとうね。残念ながらうちのバンドにキーボードはないけど、俺が打ち込みを作ってるから少しなら話もできるよ」

「打ち込み？……途中に入っていたキーボードの音ですか？」

「そ、ノートパソコンを繋いであらかじめ作っておいた音を流してるんだよ」

「そんなことができるんですか!？」

――

――

――

軽音部のみんなとの話も一段落ついた。

どうやら唯ちゃんが部室にCDを持っていき、みんなで聴いてくれたらしい。

そこで唯ちゃんがレコ発ライブに行くと自慢した結果、せっかくだから軽音部全員で見に行くという話になったそうだ。

ありがてえ、マジで。

ちなみに、梓ちゃんは途中まで一緒にいたらしいのだが、人の波に飲み込まれてはぐれたらしい。

大丈夫だろうか？

「それじゃあ私達は帰るね！またねトシさん！」

「遅いから気をつけて帰ってね、みんなも今日は来てくれてありがとうとね」

さて、心配だから梓ちゃんを探すとするか。

| | |

| |

|

「いたいた、大丈夫？これ、水だけだよかった」

「トシさん!?あ、ありがとうございます。すいません、挨拶に行こうと思ってたんですが……」

「いやいや、途中で人波に飲み込まれる梓ちゃんが見えたから心配だったんだよ。怪我してない?」

「はい、大丈夫です。少し疲れましたが、座っていただけだいぶよくなりました」

梓ちゃんは背が低いからステージを見るには前の方に行くしかないんだよね、……次やるときは女性と高齢者用の席でも作ろうかな。

せっかく来てくれるのに見れないのは申し訳ないからなあ。

「あの、すごいカッコよかったです!CDで聴いて楽しみにしてたんですけど、やっぱり

生で見ると全然違って……私感動しました！」

「よかった、バンド冥利に尽きるよ」

「新曲も全然違う雰囲気で、インスト曲をライブで聴いたのは初めてだったんですけど、みなさんすごい上手で。私もあんな風にバンドがしたくなりました！」

「梓ちゃんは軽音部とか入ってないんだっけ」

「はい、私の中学には軽音部がないので……」

「それじゃあ外で組むか……知り合いなら紹介できるけど」

「いえ、まだ技術が不安なので外で組むのは……」

「じゃあ高校生になったらかな、桜ヶ丘に行きたいんだっけ？」

「はい、唯さんに軽音部のみなさんに紹介してもらって。高校生になったらぜひ一緒にやらないかと」

「いいなあ、同じ学校のメンバーでバンドかあ。そういうの憧れるなあ」

「みなさん優しい人達みたいなので、今から高校生活が楽しみです！」

「うん、曲ができた如果说てくれれば川上さんに紹介するし、なんなら対バンもしたいしね」

「本当ですか!?!ぜひ対バンしてみたいです!!」

俺は今高校三年だから梓ちゃんが高校生になったら大学生になつてるだろうけど、楽器屋のバイトと講師は続ける気だからね。

……大学生になれるよね？ なるるはず、たぶん、メイビー。

「もう遅い時間だけど、梓ちゃんは迎えとか来てくれるの？」

「いえ、さすがに両親に悪いので迎えは頼んでないです。駅から近いですし、大丈夫ですよ」

「いや、さすがにこの時間に一人で帰すのは怖いなあ。……ちよつと待つててくれる？」

「はい、大丈夫ですけど。一人で帰れますよ？」

「いいからいいから」

ここで登場しますは、本日車で来ているはずの我が姉。
機材とか運ぶの手伝ってもらったからまだいるはず。

「いたいた、姉さん」

「トシ、いいライブだったわよ。なにか用？」

「かくかくしかじか」

「まるまるうまうま」

さすが我が姉わかつてる。

「と、いうわけで姉さんが送っていつてくれるから。遠慮せず足にして」

「いえ！さすがに悪いですよ！」

「なに言ってるのよ、教師としてこんな可愛い子を一人で帰すわけにはいかないわよ。お礼は今度会ったときに猫耳つけてくれればいいから」

「……猫耳？」

「たまに変なこと言うけど教師なのは本当だから、それに姉さんも昔はギター弾いてたから、ギターの話でもしながら乗せていつてもらいなよ」

「……本当にいいんですか？」

「いいのいいの、ほら乗った乗った」

梓ちゃんは姉さんに車に押し込まれるとそのまま夜の闇に消えていった。

はたから見たらちよつとした拉致だったけど悪いことはしてないから許してもらえ
るだろ。

「おーい、トシー！そろそろ打ち上げ始めるぞー!!!早く来いよー！」
「はーい、今行きますー」

とりあえず、初レコ発ライブは大成功ということでしょう。

……いいよね？

5話

「唯ちゃん達の教室はここかな？」

「パンフレットだとここですね、……すごいしゃがれ声が聞こえてくるんですけど」

「……ああ、じゃあ間違いないわ」

今日は桜ヶ丘の学祭にお邪魔している。

唯ちゃんにお誘いを受け、梓ちゃんと一緒に唯ちゃんの教室を探してたのだが……。

「いゝらゝっしやーいゝ、あゝ！ドジさん！あゝずにゝやんゝ！」

「……うちのバカ姉がごめんねホントに、ホントに」

「いゝいゝんだよ！頼んだのは私だから！それより焼きそばどうだいゝ！サービスするよおー！」

「それじゃあ2つお願いします」

「まゝいゝどお!!!」

ギターボーカルの特訓と称して、姉さんが唯ちゃんを鍛えた結果、ご覧のように当日に喉を潰してしまつたらしい。

マジでなにやっつてんだあの教師。

「は、い、！焼き、そばお、待ち！ラ、イブも、見て、い、つて、ねー！」

「ありがと、楽しみにしてるよ」

「私も唯さん達のライブ楽しみです！」

――

――

――

「お！お二人さんデートかい？お化け屋敷いかがですかー！」

「で、デートじゃないです!!!なに言ってるんですか律さん!!!」

さすがに高校三年が中学三年とデートしてたら捕まらないにしろよくないでしょう。

……真っ赤になって否定する梓ちゃんが見れたからグツジョブ律ちゃん。

「中でムギがお化け役やってるからよかったら見てってやってよ、梓ちゃんにはちよつと刺激が強いかもしれないけどね〜」

「お！お化けなんか怖くないです！やってやるです！行きましようトシさん！」

煽りスキルたけえな律ちゃん。

てか煽り耐性低いな梓ちゃん。

――

――

――

「うらめしや〜」

「お、ムギちゃん。お疲れ様、ライブ楽しみにしてるね」

「あら？トシさんに梓ちゃん、いらつしや〜い」

「ムギさん、そんなお化けつぽい演技しながら挨拶しないでも」

「怖くなかったかしら？残念……」

シヨボンとしてしまった。

「あれ、トシさんに梓ちゃんと……ムギ？」

あら、濤ちゃんどうしてお化け屋敷の中にいるんだ？

――

――

――

とりあえず固まっても邪魔になるので、お化け屋敷を後にして軽音部の部室で話を聞いた。

どうやらライブ本番前の練習をしたくてメンバーを探していたが、みんなクラスが忙しく練習できないらしい。

わかる、本番前って緊張するよね。

「まあ、あんまり緊張しすぎても演奏に支障がでるかもしれないからね。俺はライブ前には好きなバンドの曲とか聴いてリラックスするようにしてるよ」

「好きなバンド……」

「濡さんはどんなバンドが好きなんですか？」

梓ちゃんの質問に、濡ちゃんは少し恥ずかしそうにしながらこちらをチラチラ見て。

「……最近はずっと『i n v i d i a』ばかり聴いてる」

あら嬉しい。

「それは嬉しいなあ、……でもリラックスできる感じじゃないね」

ハードコアだからなあ、さすがになあ。

……あ、そーだ。

「それじゃあせつかく3人もいるんだからセッションでもする？最近梓ちゃんと作って

る曲があるから、よかったら滞ちやんがベース乗せてみてよ」

「あ！それいいですね！ぜひやりたいです！」

「ええ!?私が!?そ、そんな、セツシヨンなんてやったことないし……」

「大丈夫大丈夫、ある程度コードは考えてあるから。それに気が紛れてリラックスできると思うよ」

「……それじゃあ、ちよつとだけ」

よし、正直俺がやりたいだけだけど、一旦ライブのことを忘れてみるのも一つの手だ
と思うし。

前に『*invidia*』でやったインスト曲は紆余曲折あって*toe*っぽくなっ
ちやつたから、梓ちやんと*chonn*っぽい作つてた所なんだよね。

「それじゃあまず……」

——

——

—

「……とりあえず形にはなったかな？」

「やっぱすごいです滯さん！初めてだったんですけど合わせたのにこんなにピッタリなんて！」

「原さんに教わった練習の成果かな、でもトシさんはもちろんだけでも梓もそんな難しいフレーズが弾けるなんて。今から一緒にバンドをやるのが楽しみだよ」

楽しんでもらったようだなによりだ。

時間も調度いいだろう、部室の外に気配がするし。

「こらあー！！滯ー！！私達じゃなくてその二人とライブする気かあ！カッコいいことしやがってえ！私達も混ぜろー！！」

「ずるい、よ滞ち、やん！！私達とは遊びだったの！」

「綺麗な音楽だったわあ、聞き入っちゃった……」

思いの外好評価で嬉しい。

……本格的にバンドでやってみるのもありだな。

「それじゃあメンバーもそろったみたいだし、俺達はおいとましようかな。ライブ楽しみにしてるよ」

「そうですね。せっかくだからライブでみなさんの演奏を聴きたいですし」

「え、二人とももう行つちやうの、？」

「そうだそうだと！滞りだけズルいぞー！」

「それじゃあまた今度機会があったらみんなでセッションしてみようか、今日はひとまずライブに集中しなきゃだからね」

機会があつたら、便利な言葉だぜ。

とりあえず滞りちゃんの緊張をほぐすというミッションは達成されたのでおいとまよう。

――

――

――

講堂の中は人でいっぱいだった。

この人数の前でライブするとかうらやましいな。

ライブハウスはライブハウスのよさがあるけど、こういう広いステージも違った良さがある。

聴かせるインスト曲ならこっちの方が映えるかもしれないな。

「すごい人です……」

「学祭とはいえこの人数の前でライブするのは緊張しそうだね。リラックスしてるといいけど」

言ってるうちに軽音部達がステージに出揃った。

見た感じ緊張は……、してるなありや。

まあ、演奏に支障が出るレベルではなさそうか。

横を見ると、梓ちゃんがキラキラした目でステージを見ている。

「梓ちゃんもこういう所でライブしたくなかった?」

「はい、それにみなさんのバンド見るの初めてなので楽しみですよ!」

「そだね、ギターは唯ちゃんに聴かせてもらった……っというか教えたから知ってるけど、ちゃんとした演奏は俺も初めて聴くから楽しみだ」

お、どうやら演奏が始まるらしい。

6話

シマパンが印象的だった学祭も終わり、そろそろクリスマスが近づいてきた。

演奏の後に感想を言いに行ったら滞ちゃんに逃げられた。

脱兎のごとく。

でも滞ちゃんの歌上手かったし、みんなも楽しそうに演奏していてよかったと伝えてもらった。

「トシさん！聴いてる？」

「あ、ごめん、ボーつとしてた」

「わかる、私もよくボーつとしちゃって和ちゃんにしかられるんだ」

「で、クリスマス話だったっけ？」

「そうそう、うちでクリスマスパーティーするからトシさんもどうかないって。あずにゃんも誘ってるんだ」

「クリスマスパーティーねえ、まあ今年はライブの予定もないし暇だとは思うけど、でも俺が行ったら邪魔になるんじゃない？」

「そんなことないよお〜！みんなもぜひ来て欲しいって言ってたし」

「ん〜、だったらお邪魔しようかなあ。姉さんは誘ってあるの？」

「あ！さわちゃん先生のこと忘れてた！誘わなきゃ！」

「たぶん今年もクリスマスは寂しいことになってるからぜひ誘ってあげてね」

毎年のように家で酒に溺れるからなあの人。

延々と愚痴を垂れ流す機械が横にある状態でのクリスマスとかマジ勘弁。

一ヶ月前に彼氏と別れたらしいから、うちに来たら絶対ウザイことになる。

「プレゼント交換するから用意しておいてね！……あ、あと一人一芸だよ！」

「プレゼントは暇なときに買っておくとして……、一芸かあ」

「フフフ、楽しみにしてるからね！」

女子高生にウケる一芸とか難易度高いな。

――

――

「梓ちゃんはプレゼント決めた？」

「はい、なんとか決まりました！トシさんも決まりました？」

「うん、面白そうなものがあつたからそれにするよ。ところで梓ちゃんは芸なにするか考えてる？」

「ああ、唯さんが言つてたヤツですか。あれ、滝さんに聞いてみたら嘘みたいですよ」

マジかよ、騙されてたわ。

やるな唯ちゃん、さすがが原作主人公。

「……そうだったんだ」

「……信じてたんですね」

「ギター一本でできるインスト曲でも披露しようかと思つてただけどね……」

「ぜひやりましょう！みなさんに一芸するよに説得しておきます！せっかく練習しているのにやらないなんてもったいなすぎです！」

小さい握り拳を作り、目をキラキラさせてずいぶん前のめりに食いついてきた。
……こんな妹が欲しかったなあ。

「じゃ、じゃあ練習しておこうかな」

「はい！楽しみです！」

—————

—————

—————

—————

—————

ここが唯ちゃんの家か、立派な一軒家だなあ。

チャイムを鳴らすと「はい」と声が聞こえてくる。

「はい、どちらさまで……。あ！もしかしてお姉ちゃんが言ってた、ギターの先生のトシさんですか？」

「はい、唯ちゃんのギター講師をしてる山中斗心です。君は唯ちゃんがいつも話してる妹さんかな？」

「はい！平沢憂です！お姉ちゃんがいつもお世話になってます、憂って呼んでください」

しつかりしたい子や、唯ちゃんとはだいぶ違うタイプな子だなあ。

「みなさんもう来てるのでどうぞあがってください。……あの、その荷物は？」

「ああこれ？これはプレゼント交換の景品だよ、みんなには内緒にしておきたいから、玄関に置いていてもいいかな？」

「なるほど！はい！大丈夫ですよ」

選んだプレゼントが思ったより大きかったので運ぶのに台車を使った。

正直当たった子が持って帰るのめんどくさいとは思うけど、まあ使えない物じゃないから勘弁して欲しい。

「ありがとう、じゃあお邪魔します。あ、よかったらこのお菓子食べて」

「わあ！ありがとうございます！」

さすがに手ぶらは申し訳ないからね。

しかし、クリスマススを姉さん以外と過ごすのは久しぶりだなあ。

高校にも友達はいるにはいるが、一緒にクリスマススを過ごすようなヤツはいないし。バンドメンバーもコリアスさんと原さんは妻子持ちだから、クリスマスは家族優先ないいパパだからな。

あ、河口さんは彼氏がいなときは姉さんとうちに來て愚痴つてたわ。

「お邪魔します、お、みんなもう來てたんだ」

「あートシさん！いらつしやくい」

軽音部のメンバーと梓ちゃんはすでに到着していたらしい。

濡ちゃんが俺の顔を見て、顔を赤くしたあと居心地悪そうにしている。

……シマパンなんて忘れたよ、俺は大人だからね。

「……あれ？姉さんは？」

「さわちゃん先生はまだ來てないよ？トシさんと一緒じゃないの？」

「いや、別々に行くって話だったから。……まあそのうち来ると思うよ」

マイペースな姉さんは放っておいてもいいと思う。

すねるかもしれないけど社会人なのに時間守れない自業自得というやつだ。

……あ、噂をすれば姉さんが忍び込んできた。

無駄にスニーキングうまいな。

「そっかあ、……それじゃ和ちゃんも遅れるって言ってたし、先に始めよつか!」

「そうね」

「「「……え!?!」」」

ちよつとした阿鼻叫喚になった。

しかもコスプレを強要しだしたし。

いや、唯ちゃんはノリノリだったからいいけど、濡ちゃんと梓ちゃんは本気で嫌がってるからダメだろ。

「はいストップ」

チヨップ

「痛っ!?!もう、なにすんのよトシ」

「仮にも教師なんだから、男の前で女子高生にコスプレさせようとするなよ……」

「トシさあ〜ん」

澪ちゃんと梓ちゃんがメシアを見るような目でこちらを見ている。

姉さんを凶行を阻止している間に真鍋さんも到着したらしい。

「はじめまして、真鍋和といいます。トシさんですよね?唯がお世話になってます」

「こちらこそはじめまして、山中斗心です。真鍋さんのことも唯ちゃんから聞いてるよ」

「和で大丈夫ですよ。みんなも名前で呼んでいるみたいですし、私もトシさんとお呼びするので」

「じゃあ和ちゃんでもいいかな?学校で姉さんが迷惑かけてるかもしれないけどごめんね」

「ちよつとそれどういう意味よ〜」

そのままの意味だよ。

「それじゃあみんなそろったし、さっそくプレゼント交換するかー!!!」
「「「おーーー!!!」」」

これが若さか!

ちなみに俺のプレゼントはでかすぎるので、引換券という形にしてある。
見た目一番ショボいけど気にしない、いいね?

「それじゃあプレゼント交換するわよー!!!」

こうしてプレゼント交換が始まった。

みんなでジングルベルを歌いながら手渡ししていき、歌が止まったところで持っているプレゼントを受け取るらしい。

……てか姉さんのプレゼント、一ヶ月前に別れた彼氏にあげるつもりだったやつじゃね?!

張り切ってだいたいぶ早めに買ってるのを自慢された覚えがある。

使い回すなや。

「……ストップ!!! さあ、プレゼントはなにかしらー!!!」

最終的に姉さんは律ちゃんのプレゼントになった。

姉さんが開けた瞬間、ビックリ箱が顔面にクリーンヒットした。

無言で律ちゃんにサムズアップする。

「……フフフ、アツハツハツハツハ!!! 楽しいわあー!!! たのすいわあー!!! メリイクリスマスウー!!! メリイクリスマスウウウ!!!」

ぶっ壊れた。

いつものことだから気にしないけどな。

俺がもらったプレゼントは姉さんのチヨイスしたデスメタルバンドのCDだった。

前も思ったけど彼氏にあげるもんじゃねえよな、聴くけど。

唯ちゃんが「これを彼氏にあげるつもりだったんですか？」と聞いて姉さんがまた騒ぎだした。

どんまい。

「私のプレゼントは……手紙？」

「それは俺のプレゼントだね、開けてみてよ」

「トシさんのですか!?開けてみます……引換券？」

「そ、ちよつと大きいやつだから邪魔になるかと思つて玄関に置いてあるんだ。今持つてくるよ。」

玄関に置かせてもらっていたプレゼントを居間に持つてくる。

「うわ!?デケーー!」

「なになに!?何が入ってるの?」

「あの一!開けてもいいですか!」

「いいよ〜」

澪ちゃんが包装を丁寧に剥がしていく。

こういうところだね、姉さんだつたら問答無用で破り捨てるし。

少しは澪ちゃんとかムギちゃんとか和ちゃんに学んだ方がいいと思う。

「これは……ギターアンプ!？」

「惜しい、ギターアンプの形をした冷蔵庫だよ。前に懸賞で応募したら当たったやつなんだ。俺は使わないから、よかつたら自分の部屋とか部室とかで使つてよ」

「え、こんな高そうなものいいんですか!？」

「うん、懸賞だからタダだったからね。ホコリ被らせとくのもつたいないから」

「滯!それは我が軽音部の部室に置くことにしよう!そうすれば夏場でもムギのお菓子を冷たくしておける!」

「そうだねりっちゃん!ぜひ軽音部に置くべきだよ!」

「わかつたわかつた、……ありがとうございますトシさん、この冷蔵庫はみんなで大事に使いますね」

「うん、仲良く使つてくれたら嬉しいかな」

こうして無事?プレゼント交換は終わった。

和ちゃんの海苔の缶詰というチョイスは個人的に好きです。

「よーし!それじゃ一芸披露でもするか!」

――
――
――

憂ちゃんの腹話術がなかなかの完成度だった。

姉さんの紅葉は女捨ててる感じあるから他所ではやるなよ？

ムギちゃんのマンボウの真似は芸術点高かった、推せる。

あと濡ちゃんのミニスカサンタは破壊力あった、さすがに直視するのは憚られたので見えないふりをしてこっそり見てました。

ごちそうさまです。

現在は梓ちゃんが持つてきたアコギでふわふわタイムの弾き語りをしている。
なかなかの完成度に軽音部が喜んでる。

「……どうだつでしょうか？」

「すごいよあずにゃん！さすがだよ！」

「ああ、弾き語りにするといつもと違った感じで面白いな」

「こりや来年からボーカルは梓かな？」

「りっちゃん!? 私はクビなの!？」

「ハハハ、冗談冗談」

みんなに誉められて照れてる梓ちゃん可愛い。

さて、次はいよいよ俺の番か。

「次はトシさんだよ」

「はいはい、それじゃあちよつと準備するから待つてねー」

「ん? トシさん、そのちっちゃいアンプみたいななのになに?？」

「これはアンプだよ、ライブとかだと使えないけど部屋で弾く分には十分な音量は出るからね」

「可愛い〜! いいなあ、私も買おうかなあ」

「可愛いって……でも一つ持つてると便利かもしれないね」

確かに便利だし可愛い、見た目マーシャルそのまま小さくした感じだからインテリアとしても使えなくもない。

「あれ、そのギター7弦ですか？」

「本当だ！私のより一本多い！いいなあ」

「なに言ってるんですか唯さん、7弦ギターは弦が増える分ネックも広くて運指が大変だし、ミュートする弦も増えるから大変なんですよ」

「そうだな、それに放課後ティータイムじゃ7弦を使う曲はないし」

「そっかあ、7弦にしたらギターがもつとカッコよくなると思ったんだけどなあ」

「6弦ギターは7弦にはできませんよ……」

「ところでトシさんはどんな一芸をするんですか？」

いい質問だ瀞ちゃん。

「最近作ったインスト曲を披露しようかなって。……といっても普段『invidia』でやってるような激しいのじゃなくてリラックスできる曲だから安心していいよ。和ちゃんや憂ちゃんもいるからね」

さすがに慣れてない人にメタルみたいなギターを聴かせるほど鬼畜じゃない。

姉さんとか河口さんはやりかねないけど。

「……よし、それじゃあ準備できたからそろそろいくね。まだ仮だけど、タイトルは『b e l l』……」

――――

――

――

――

「……とまあこんな感じなんだけど、どうかな？」

「……反応がない。」

「全員固まってしまっている。」

「あ、唯ちゃんが復活した。」

「すごい!!!すごい綺麗だったよトシさん!!!」

「お、おお、ありがとう」

「……すごかったです！こんな綺麗な音色でタツピングまでしてほとんどミスもないなんて、さすがですトシさん!!!」

唯ちゃんと梓ちゃんに好評でよかった。

その後も続々と復活した軽音部メンバーが絶賛してくれた。

ちなみに律ちゃんは運指を見ていて酔ったのか、途中から目をつぶっていたのを見えたからな？

「……唯、あなた本当にすごい人にギター教わってるのね」

「でしょー！トシさんはすごいんだよ」

「よかつたら和ちゃんと憂ちゃんの感想も聴きたいな。この曲は普段ライブに来たことがない人でも楽しめないかなと思って作った曲だから」

ちなみに参考にしたのは ichikaさんの『a bell is not a bell』という曲だ。

綺麗なインスト曲だから、ライブ慣れしてない人でも興味を持って欲しいと思って

作ったからね。

「そうですね、……私はあまり音楽は聴かないので細かいことは言えないですけど、すごくいい曲でした。できればもつと聴いていたいと思えるような」

「私もです！お姉ちゃんのギターは聴いたことがあるけど、ギターってこんな音も出せるんだなって感動しました！」

「ならよかった、……もしかしたらそのうちライブとかCDも作るかもしれないから、その時はぜひ来て欲しいな」

「はい、ぜひ誘ってください」

「あ！ズルイ！私も私も！」

「私もです！」

掴みは上々みたいでよかった。

こういつた普段音楽を聴かない人達がライブに興味を持つてくれると嬉しい限りだ。それだけで今日来たかいがあった。

「トシさん！私にもさっきのピロロってやるやつ教えて〜！」

「唯さんにタッピングはまだ早いと思いますよ?」

「え、あずにやん厳しいよお」

……まあタッピング教えるのはいいんだけど、そうすると変な上達の仕方することになると思うよ?」

前にスウィープ奏法だけ練習してた先輩がいたけど、スウィープはめちやくちや上手いのコードは一つも知らないっていう変人になってたからね。

……いや、どこで使うのそのスウィープ?

「あ、そういえばトシ、あんた軽音部でコーチしない?」

「「「「え?」「」」」」

いきなりなに言い出してんだこの姉は。

「私は一応顧問だけどギターしか教えられないじゃない? トシなら全部の楽器を一通り教えられるから調度いいかなあ」って」

「いいよそれ! さわちゃんさすが!」

「たまにまともなこというよなあ」

「……りつちゃん、たまにつてどういうことかしら？」

「げ!?!いや、それは……」

体罰はあかんやろ体罰は。

「でも桜が丘つて女子高だろ？さすがに男の俺が行くのは問題になるんじゃないか？」

「それなら大丈夫よ、もう校長先生から許可はもらつてるから」

「は？」

「私の弟だつて言つたら問題ないつて、このさわ子先生を甘く見ないことね！」

「さわちゃん外面だけはいいからなあ」

「……だけつてどういふことかしら？」

律ちゃんこりないなあ。

「トシさん！コーチしてよ！トシさんがコーチだったら滯ちゃんもムギちゃんも嬉しい

よね!!!」

「……確かに、練習といっても独学でやってきただけだから。……もしトシさんが迷惑じゃないなら、コーチしてくれたら嬉しい、かな」

「私もです、音の作り方だけでも教えてもらえたら嬉しいです」

マジか、いや、学校終わりにバイトない日なら全然行けるけどなあ。

「……ん、じゃあとりあえず仮コーチとして何回かやってみようか？ 軽音部はいいかもしれないけど、他の生徒達から苦情があつたら不味いからね。女子高に年の近い男がいるのを嫌がる子もいるかもしれないからね」

俺の言葉に、若干不安そうにしていた和ちゃんもホッとするような表情を見せたので正解だったのだろう。

「つてことで大丈夫かな姉さん？」

「え？ あ、うん、いいんじゃない？」

話聞いてなかっただろこいつ。

| | |

| |

|

こうして、クリスマスパーティーは無事？ 終わり新曲のお披露目は成功、そして、桜ヶ丘での仮コーチをすることが決まった。

あと姉さんが、無礼すぎた罰として律ちゃんにミニスカサンタコスをさせていた。しかも、可愛いからと前髪を下ろさせていたためメチャクチャ恥ずかしがってた。

濡ちやんの時のように見ないフリをしようとしていたら、姉さんに罰にならないからとしつかり見ろと言われた。

感想を求められたので「前髪を下ろしているのも可愛いくて似合ってる」と伝えたら真っ赤になって隠れてしまった。

なにあの可愛い生き物。

7羽

俺の大学受験も無事終わり、近くの大学に進学することができた。

バンドサークルがあつたので見学に行ったら『i n v i d i a』のファンという人がいて照れてしまった。

あまり活動には参加できないが、たまに顔を出す程度でいいからと入部することになった。

軽音部のコーチとしてはもう何度かお邪魔している、今は新歓に向けての練習中だ。

まあ、梓ちゃんが無事合格したから一人は確定してるんだけどね。

どうせならもう一つバンド組めるぐらい人が集まるといいよね。

『i n v i d i a』の活動ももちろんしている。

音源も作成できたので、今はコンテストに応募しているところだ。

グランプリを取れば、有名なフェスに出演することができるといいので頑張りたい。

一次の音源審査は通つたので、次はネットでの一般投票、そして上位10バンドが実際にライブを行って、グランプリを決めるらしい。

正直メンツ的には残ってもおかしくないと思っ
ているので、あとはジャンルの一般
受けするかといったところだ。

まあ、なるようにしかならないと思うので、
そこまで気にしてはいない。

――

――

――

「……なるほど、で、今のところ梓ちゃんしか捕まえていないと」

大学の方がいろいろ落ちついたので、新歓ライブが近いという軽音部を見に来た。
なぜかキグルミで出迎えられた。

「ちなみになんでキグルミ着てるの？誰がどれ？」

「かわいいからだよ！」

「おっけー、唯ちゃんはわかった」

話が一番通じる滯ちゃんに事情を聞くと、姉さんが持つてきたらしい。バカじゃねえの？

ちなみに、二番目に話を通じるのは以外にも律ちゃん、根は真面目らしい。唯ちゃんとムギちゃんはネジ飛んじやつてる時がたまにある。

「……すいませーん」

「お邪魔します……あれ、男の一人だ」

後ろから声がしたので振り向いてみると、そこには憂ちゃんと見知らぬ癖っ毛ツインテールの子がいた。

事情を聞いてみたところ、どうやらあまりにも人がいないことを心配した憂ちゃんが友達を連れてきたらしい。

友達は純ちゃんというらしく、ベース志望らしい。

できた妹だ、……というか憂ちゃんは入部しないのだろうか？

「よし！それじゃあコーチ！よろしくお願いしますー！」

「……………めん聞いてなかった、もう一回お願い」

「えー？だからー、1年生にカッコいい演奏を見せてあげてくださいってー」

「いや、とりあえず放課後ティータイムの演奏見せてあげなよ」

「そうだよ！つちゃん！私達、先輩なんだからね!!」

そりやそうだ、あくまでコーチですからね。

まあ、コーチの腕が心配だから弾いてみろって言われたら弾くけど。

せつかく1年生が入ってくれそうなら、先輩達のカッコいいところを見て決めて欲しい。

――

――

――

「……お姉ちゃんカッコいい!」

「……すごかったです!」

しっかり後輩の心を掴めたらしい。

純ちゃんの後半濡ちゃんに釘付けだった、濡ちゃん背高いし姿勢もいいからベースが映えるよね。

これなら純ちゃんも軽音部に入ってくれそうかな？

「……失礼します、……あれ、演奏終わっちゃいましたか？」

「あ、あずにゃん」

「はい、友達を連れてきたんですけど……」

「やるなあずさ！大丈夫大丈夫、これからトシさんが演奏してくれるから！」

なに言ってるんだこの子、いやグツじゃなくて。

「本当ですか!?!よかった！ほら、春香も聴くでしょ？」

「トシさんってあずさが教わってる人だよね？……じゃあ聴いてみようかな」

……気がついたときには、すでにやるしかない空気が出来上がっていた。

いつの間にやら唯ちゃんのギターを渡され、1年生は椅子に座り、2年生がその後ろに控えている。

もう にげられ ない。

「……はい、じゃあ弾きます」

——

——

——

「……とまあ、こんな感じかな？」

7弦じゃないので、前回の『beer』は弾けなかった。

仕方ないので、みんなが知っているであろうプリンセスオブモノノケから、アシタカ
せつ記を弾いてみた。

反応は上々だ。

「さすがあずさの師匠……あの曲ってギター一本で弾けるんだ……」

「トシさんは普段はオリジナルバンドでギターボーカルしてるから、歌もすごく上手い

んだよ」

あずさちゃんあんまりハードル上げないでお願い。
純ちゃんは大丈夫かな？固まってるけど。

「すごかったです、ね！……純ちゃん？」

「……決めた、私軽音部入る」

お気に召したらしい、よかったよかった。